

イブコナゾール・銅水和剤 テクリードCフロアブル	取扱メーカー： クミカ 原体メーカー： クレハ、——
成分： イブコナゾール〔エルゴステロール生合成阻害剤〕……………5.0% 水酸化第二銅〔銅〕……………4.6% （銅として……………3.0%）	性状： 淡青緑色水性和性粘稠懸濁液体 毒性： 普通物 消防法： ——

【品目特性】……………

- 2つの有効成分の混合剤で、ばか苗病、いもち病、ごま葉枯病に加えて、細菌病であるもみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病に有効な稲の総合種子消毒剤である。
- 種もみへの薬剤の付着性、浸透性に優れるため、風乾処理の有無にかかわらず高い防除効果を示す。
- フロアブル剤なので、薬液の調製が容易で、懸垂性も良好である。
- ベンズイミダゾール系薬剤耐性ばか苗病菌、カスガマイシン耐性褐条病菌にも有効である。
- 薬剤消毒もみを長期間保存しても安定した防除効果を保つ。
- 有効成分の特性は参考資料の「有効成分特性一覧表」を参照。

【使用上のポイント】……………

- 種子消毒は浸漬前に行い、消毒後は水洗いせず浸種する。
 - ハト胸催芽機やエアーレーション付きの水槽等で浸種すると、黒色の粘性物が発生する場合があるので、使用しない。
 - 薬液の温度は極端な低温をさける。
- 〈浸漬処理〉
- 処理する種もみはネットなどの目の粗い袋などに入れて浸漬する。
 - 種もみと処理薬液の容量比は1：1以上とする。
 - 薬液の温度は極端な低温をさける。
 - 薬液処理時は種もみの袋をよくゆすり気泡を除く。
- 〈塗沫処理〉
- 適当な容器内で薬液を滴下するなどして、種もみに均一に付着させる。なお、原液塗沫の場合、

乾燥もみは付着を良くするためもみの2%相当の水であらかじめ種もみを湿らせ、（また塩水選水切り後などの湿ったもみはそのまま）塗沫する。

〈吹付け処理〉

- 種子消毒機を使用して、種もみに均一に薬液を付着させて乾燥させる。

【薬効・薬害等の注意】……………

- 処理を行った種もみを浸種する場合は、次の事項を守る。
 - 浴比は1：2とし停滞水中で浸種する。
 - 10℃以下の極端な低水温での浸種は、催芽や出芽が遅延、抑制される場合があるので、必ず10℃以上（15～20℃が適温）の水で浸種する。
 - 水の交換は、水温が高い場合など酸素不足になるおそれがある時は静かに換水する。
 - 河川、湖沼、ため池などで浸種しない。
- 処理により、軽度の初期生育遅延を認めることがあるが、その後回復するので通常の管理を維持する。
- チウラム混合剤との混用及び同剤処理もみとの同時浸種は細菌病防除効果の低下を生じる場合があるのでさける。
- 亜鉛を劣化させることがあるので、使用する器具などは亜鉛製のものを使用しない。
- 適用作物（稲）の薬害などの注意は「薬害注意事項解説」を参照。

【安全対策上の注意】……………

- 藻類に影響を及ぼすおそれがあるので、使用散布器具・残液及び容器の洗浄水等は適切に処理する。



【適用と使用法】

作物名	適用病害名	希釈倍数	使用 時期	本剤の 使用回数	使用方法	イブコナゾールを含む農薬 の総使用回数	銅を含む農薬 の総使用回数	
稲	もみ枯細菌病 苗立枯細菌病 褐条病 ばか苗病 いもち病 ごま葉枯病 苗立枯病 (リゾープス菌) 苗立枯病 (トリコデルマ菌)	20 倍	浸種前	1 回	10分間種子浸漬	1 回	—	
		200 倍			24時間種子浸漬			
		7.5 倍 使用量は乾燥種もみ 1 kg 当り 希釈液 30 ml			種子吹付け処理 (種子消毒機使用) 又は種子塗沫処理			
		4 倍 使用量は乾燥種もみ 1 kg 当り 希釈液 20 ml						
		原液 使用量は乾燥種もみ 1 kg 当り 原液 5 ml						種子塗沫処理